

聞名仏教

第 134 号 毎月発行
(発行日) 2021 年 11 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/
振替 00930 (7) 146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

錫杖は語る 佐々木蓮磨

日本のいくつかの名城が
戦災でやけたことは、まこ
とに残念でありました。

大垣城も戦災で焼かれた
一つであります。城その
ものが焼けたことよりも、
その城の天守閣に掛けてあ
った錫杖がなくなつたこ
とを残念に思うものであり
ます。

この錫杖の由来について
は知っている人が極めて少
ないようです。地元の大垣
の人に聞いても、知らぬ人
が多いように思われます。
私はかつて佐々木月樵先
生から聞いた話ですが、す
べて城を築くときには必ず
人柱―犠牲になつて生き
ながら地下に埋まることが
―が必要条件であつたそ
うです。

ところが、大垣城を築く
とき、用意万端が整つたに
もかかわらず、一番大切な

人柱になるものがないの
で行き悩んでいたところ、
偶然、どこから来たとも知
れぬ行脚僧が錫杖をつれて
現れ、あちらこちらで人が
寄つて「困つたことだ」「ど
うしたものか」と話し合つ
ているのを見て、「一体あな
たがたは何を心配しておら
れるのであるか」と聞いた
ので土地の人達は「実はお
城を築く計画で準備万端整
つたのであります。肝腎
の人柱になるものがない
ので困つていたところす」
と答えたところ、今の行脚
僧が聞かれるには「その人
柱は誰でもよいのですか」
と。

そこで土地の人達は「そ
れは何処の誰でもかまわな
いので、ともかくも生きな
がら地下に埋もれてもらえ
ば、それでよろしいのです。」
と答えると、今の行脚僧は
「それでは私がその人柱に
なりましょう。」と気安く引

き受けたので、一同は狂喜
し早速定められた土地に穴
を掘つて、その行脚僧を案
内したところ、彼は何ら容
子を変えることなく静かに
穴に入つて合掌瞑目したの
で、一同はまた合掌しながら
土をかぶせ、いよいよ築
城の工事にかつたのであ
りました。

ところで彼の僧が置きみ
やげとして残した錫杖を、
せめての記念とし、また
感謝の気持ちを永久に残し
たいということから天守閣
の階上に高く掛けたとい
うのであります。

私は戦前に一度その錫杖
を見たいと思つて大垣城の
天守閣に登つたところ、佐
々木月樵先生がおっしゃた
通り、古びた錫杖が高く掛
けられてありました。私は
その錫杖を一見したトタン、
ゾツとして全身が身震い
たしたのであります。それ

は無名の行脚僧の尊い犠牲
の精神に打たれたからであ
らうと思ひます。

思うに今の行脚僧が、ど
ういう人間であるか、また、
どんな修行を積んだ僧侶で
あるか全く知るよしもない
のですが、ともかく何ら縁
故のない土地に来て、その
土地の人達の悩みを救うた
めに、自分の名前も生い立
ちも語らず、黙々と合掌し
ながら地下に埋められて行
つた心境を偲ぶとき、言い
知れぬ尊さをシミジミと感
ずるのであります。

現代のような利己主義一
辺倒が風びし、精神的な面
が枯渇しているとき、こう
した犠牲の精神に生きた無
名僧を偲ぶことも、あなが
ち無意味ではなからうと思
ひます。

(了)

〈念佛寺揭示板法語〉

姿形は異なれど
一つのいのちを
生きてゐる

攝取不捨の真理

3

(前号に続く)

では真宗ではどうして自我を立場としてアミダ仏と人(衆生)の関係を語るのでしょうか。

それは私たちが煩惱具足の凡夫であるというのが現実の私の姿だからです。私たちは真実の自己を知らず、アミダ仏を知らず、ただ自我しか知りません。そしてこの自我に非常に深く執着しています。いわば我執我愛の自我です。現実の私はどこからものを考え、何を中心に人生を考えているかと申しますと、我執的自我の立場から考えています。是非善悪、優劣、損得など、自我を中心にものごとを考えています。この煩惱的自我が現実の生活の中心になっ

ていて、この立場から離れて生活をする事ができないのです。これが煩惱具足の凡夫の日常です。

凡夫の姿を『佛説無量寿経』には非常に詳しく説かれています。その一端を引用しますと、
「世人、薄俗にして共に不急の事を諍う。この劇悪極苦の中において身の営務を勤めて、もつて自ら給済す。尊もなく卑もなし。貧もなく富もなし。少長男女共に錢財を憂う。有無同然なり。憂思適に等し。屏營愁苦し、念いを累ね慮りを積みて、念のため走せ使いて、安き時あることなし。田あれば田を憂う。宅あれば宅を憂う。牛馬六畜・奴婢・錢財・衣食・什物、また共にこれを憂う。思いを重ね息を累みて、憂念を愁怖す。」

(現代語訳)―世間の人々はまことに浅はかであって、みな急がなくてもよいことを争いあっており、この激しい悪と苦の中であくせくと働き、それによってやつと生計を立てているに過ぎない。身分の高いものも低いものも、貧しいものも富めるものも、老若男女を問わず、みな金銭のことで悩んでいる。それがあろうがなかろうが、憂え悩むことには代わりがなく、あれこれと嘆き苦しみ、後先のこととをいろいろと心配し、いつも欲のために追い回されて、少しも安らかなときがないのである。田があれば田に悩み、家があれば家に悩む。牛や馬などの家畜類や使用人、また金銭や衣食、日常の品々に至るまで、あればあるで憂え悩む。それらのものについてとにかく心配し、何度もため息をついて嘆き恐れるのである。)とあります。

この『無量寿経』は二〇〇年以上も前にインドで説かれた経典ですが、この一節だけでもいつの時代も変わらぬ凡夫の姿がリアルに説かれています。

こういう現実生きている凡夫の「私」に働きかけて、正しいあるべき状態に至らしめようとしてくださる南無阿彌陀仏の願力を聞くと、これが真宗の聴聞であります。

ですから、アミダ仏のいのちの外に私のいのちはないと言っても「我はアミダ仏なり」などということはまったく言えないのであり、言わないのであり、どこまでも「煩惱具足の私」なのであります。

ですから自我にとつてアミダ仏はまさに我ならざる大智大悲の用きであり、量りなきいのち、すなわち光明無量・寿命無量であります。

ただ自我でありつつ一個の物として私たちが存在し、他の諸物や他者と関わる働きが可能なのは、それを可能にする場があるからです。自我がそこに於て生き、そして働き得る場所はいつても今此処に与えられている場所であります。この場所は色もなく形もなく、目に見えない無限定な、いつてみれば量りないのち(寿命無量)の用きであります。

ただこの寿命無量に気がつかず、自我しか知らず、自我に固執している迷妄こそが、克服されなければならぬ問題であると仏教では教えられます。

そしてアミダ仏と人との原関係を言い当てた宗祖のお言葉が「攝取不捨の真理」というお言葉であると、私は受け取りたいのです。

この攝取不捨の真理は人の迷悟・善悪・能力の有無などの差違を超え、いつでもどこでもだれにでも貫通している平等の真理でありましょう。そしてこの真理は、悟ったり信じたりして初めて成立するというような真理ではありません。人の迷悟・人の行いの善悪に先立ってはたらいっている真理であります。そしてこの攝取不捨の真理の上にながら、それに無知であるところに迷妄があり、苦悩が起こってきます。

撰取不捨の真理に無知ゆえに、この世の相対的な価値、いわば財産とか権力とか名声とか人間関係とか、そういうものに重心がかかりすぎるようになります。そこから食欲になり、自分の欲望に対して邪魔をする者を排除しようとして、自他が対立し害しあうなどの悪業が生まれてきます。

逆に撰取不捨の真理に目覚めた者は智慧を得、自他に共通しているいのちに気がつきはじめます。「一つのいのちをみんな生きていく」ことに気がつきはじめます。そこに他者に心が開かれ、他者の苦しみに共感し、他者の幸せを願うという、そういう慈悲が少しずつ少しづつですがおのずから生まれてくるのであります。

ではいかにして撰取不捨の真理に目覚めることができるかということですが、自我しか知らない迷える凡夫の側から撰取不捨の真理を対象的に捉えようとしてもそれはまったく不可能であります。撰取不捨されているもの（人）が撰取しているもの（仏）を掴むことは絶対に不可能であります。

ここに道を求める者の壁があります。人の自我からこの真理へは断絶があります。人からアミダ仏に架かる橋はないのです。人間の自我（自力のはからい）でこの壁を乗り越えることはできません。

このような人間の限界を知りぬいて、撰取不捨の真理に気づかせよう、出あわせよう、目覚めしめよう、と撰取不捨の真理の方から衆生に名号でもってはたらきかけてくる、そういうはたらきがあることを釈迦如来が発見し、説かれたのが『佛説無量寿経』であります。そのはたらきは、広大な撰

取不捨のはたらきであるアミダ仏の本願力として説かれています。

本願力のはたらきによって私たちは撰取不捨の真理に出あい、その利益にあずからしめられるのであります。それが私たちの救いであり、真宗の救済はこの撰取不捨の利益をいただくこととであります。

以上真宗の教えの基本構造を簡単に申し上げましたが、ここからさまざまな課題や問題をさらに詳しく探求されていかねばなりません。そのことに少し触れておきます。

その一つに、よく私たちのいのちを「賜りたるいのち」といわれます。すなわち、私（人）のいのちはアミダ仏から賜ったいのちであるというお話をしばしば聴きますが、これについては少し注意しなくてはならないと思います。

たとえば、キリスト教などで、「神は万物の創造主であり、人間も神の創造物として神様から賜ったいのち

である」と言われます。これはキリスト教界ではどう解釈されているのか分かりませんが、真宗でこれと同じように受け取って、私たち人間のいのちは量りなきいのちのアミダ仏からいただいたいのちであるという風に単純に受け取ると、これは注意を要します。

と言いますのは、ここには、（いのちそのもの）と（いのちの取る形）との関係の問題があります。

そこをどう考えるのかというのですが、寿命無量のアミダは有限ないのちの根拠であり、アミダ仏のいのちを離れて人のいのち（万物）はなく、アミダ仏のいのちと人のいのちは一つであります。私のいのちを押さえて見ればアミダ仏のいのちの外にはありません。人だけではありません、さまざまな生きとし生けるもののいのちはアミダ仏のいのちによって成立しているものであり、アミダ仏のいのちを分有しているといえましょう。

ただ問題は、衆生のいのちの形、いわばいろいろな人の形、牛の形、犬などの形態や心（意識）のさまざまな性質というような形相もあるいは決定されるのかという、そうはいえませんが

そういう衆生のさまざまな形は自らの業因とさまざまな外縁によってであると仏教では言われるのであります。様々な因縁によって形づくられるのであるということ。その縁のなかで、自らの行業の縁を業因といいます。それまでそのものが行ってきた善悪の行業の因です。その他にさまざまな外縁によって、衆生のいのちはさまざまな形として現れているのであります。象かたどったのはアミダ仏ではありません。それぞれの業因業縁であります。

このようにそれぞれの業因業縁によって衆生のいのちの相（姿形・性格など）に違いがあるのですが、それと（いのちそのもの）との関係を波と海水で譬えて

【住職雑感】

第18回シヨパンコ

ンクールがポーランドのワルシヤワでこの10月に行われ、日本人の反田恭平が2位、小林愛実が4位で入賞した。これまでに日本人は内田光子の2位が最高である。1位はブルース・リウというカナダ国籍のアジア系の人。こうした国際的な音楽コンクールでは中国人・韓国人・日本人の活躍が近年目立つ。ただ演奏の審査をするのは非常に難しいと思う。今回のコンクールでも選考するのに予定の時間の2倍もかかったそうである。昔、アルゲリッチがこのコンクールの審査員の時、他の審査員の評価に憤慨し、席を蹴って出ていったという話がある。また1937年第3回シヨパンコンクールに出場した最初の日本人の原智恵子が第1次予選で失格となった時、聴衆が憤慨し、警官が出勤する騒ぎとなって、特例として「特別聴衆賞」が後だして送られてようやく騒ぎが収まったという。「特別聴衆賞」はこの一回だけで以後は出されていないという。今度のコンクールでもクラシックに詳しい幾人かが優勝者の予想をしていたが、結果どれも外れていた。人間の判断はたいして当てにならないことを知らされる。自分の考えも他者の考えも当てにはならない。仏陀は仏智に依って人知に依るなど教えられている。覺りの智慧（仏智）からでた言葉（經典など）は信頼に値するといえよう。

たようにアミダ仏の寿命無量を（無限の能力）と言いつたが、『絶対他力の大道』には次のようにも表現しています。

「宇宙万有の千變万化は、皆是れ一大不可思議の妙用に属す。而して我等は之を当然通常の現象として、毫も之を尊崇敬拝するの念を生ずることなし。吾人にして智なく感なくば則ち止む。

苟も智と感とを具備して、此の如きは蓋し迷倒ならずとするを得んや。一色の映ずるも一香の熏ずるも、決して色香其者の原起力に因るに非ず。皆彼の一大不可思議力の発動に基くものならずばならず。」

と。そうすると無限の能力である寿命無量は大自然の広大なはたらき、いわゆる物質的力用ともなつてはたらいっているといえます。諸物を成立させるはたらきであり、万物を万物たらしめている根元のはたらきと言えましよう。こうした広大な物質的な用きも寿命無量のはたらきの中に含むことになりまますから、寿命無量

は心の領域も物質の領域も統合しているいのちのはたらきと言えます。物質の領域と心の領域は二つ並んであるのではなく、無量の寿命の用きの二面でありましよう。

ですから寿命無量は衆生救済の光明のはたらき（本願力）だけではなく、万物をして万物たらしめているはたらきでもあります。

アミダ仏のはたらきをこのような領域まで包む真宗の世界観、いわば物質界の領域まで包むような世界観でない、自然科学の領域のみならず政治経済の世界を真宗の世界観の中に位置づけることが難しくなります。それでは現代人にトータルな人生観・世界観を提示することはできないと思います。ことに現代は自然科学が人間の文化全体に大きな影響を与えています。真宗の教義体系もこれらを統合するような世界観にまで展開されなくては、現代の問題に応答することは難しいと思います。（了）

みると、業因業縁によつてかたどられた衆生のそれぞれ姿は大小さまざま波のごとくであつて、しかも有限ですから生れて滅します。一方、どのような姿の波もすべて海水のほかではありません。海水が元でそこに現れるさまざまな姿が波であり、波は生じ滅する有限にたとえられ、海水は総ての波の元であつて生まれも滅しもしない無限に譬えられます。このように衆生のいのちとアミダのいのちの関係をこのような波と海水との関係に譬えることができましよう。ですからどのような形のいのちも共にアミダのいのちの他にはなく、万人万物はアミダの平等ないのちをいただいているのです。

しかるに自己がアミダ仏のいのちのほかになんことを知らず、有限ないのちの形に執着し、互いに比較し、優劣を競い、対立し、さまざまな業を重ねてきたのであります。

さて、現代は物質文明が

さて清沢師は先述しまし

たようにアミダ仏の寿命無量を（無限の能力）と言いつたが、『絶対他力の大道』には次のようにも表現しています。

「宇宙万有の千變万化は、皆是れ一大不可思議の妙用に属す。而して我等は之を当然通常の現象として、毫も之を尊崇敬拝するの念を生ずることなし。吾人にして智なく感なくば則ち止む。

苟も智と感とを具備して、此の如きは蓋し迷倒ならずとするを得んや。一色の映ずるも一香の熏ずるも、決して色香其者の原起力に因るに非ず。皆彼の一大不可思議力の発動に基くものならずばならず。」